

肝心かなめの

肝臓 のはなし

3

香川大学医学部消化器・神経内科教授
正木 勉

B型肝炎には急性と慢性があり、今月はB型急性肝炎についてお話しします。慢性肝炎は血液中の肝酵素（AST、ALT）の上昇が6カ月以上続く症状。急性肝炎は、6カ月以内でAST、ALTの値が治まるものです。

現在、急性肝炎のうち、B型急性肝炎が約40%を占めています。原因はほとんどがB型肝炎感染者との性交渉によるもので、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）との共感染が多いのもこのためです。

B型急性肝炎

多くは性行為を通じ感染
一過性感染だが慢性化も

B型急性肝炎は、約1〜3カ月の潜伏期間を経て感染し、先月お話ししたA型急性肝炎と同様、体がだるい、食欲がない、吐き気・嘔吐など風邪に似た症状があり、重篤になると黄疸も見られます。

診断は、血液検査ですぐ判明します。まず、肝臓が炎症し、肝細胞の壊死の度合いを示すAST、ALTの上昇と、肝炎ウイルスのマーカーであるHBsAg、HBVDNAが陽性であり、かつIgMHBc抗体が陽性であればB型急性肝炎といえます。

成人になって起こる感染は一

過性で、自然に臨床的治癒となります。一般的に慢性化は起こらないとされていましたが、最近、ウイルスのタイプによっては慢性化する場合も少なくないことが分かってきました。B型肝炎ウイルスには、大きく分けてジェノタイプA、B、Cがあり、日本においては、ほとんど（90%以上）がCです。しかし急性肝炎では昨今、海外から移入されたAタイプ（欧州に多い）の比率が高く、このタイプは約10〜20%が慢性化に移行すると考えられています。またまれに劇症化を起こし、死に到る場合もあります。

一検査受け感染防ごう

治療はA型急性肝炎と同様にベッド上安静です。重症化が懸念される場合は、保険適応では

ありませんが、抗ウイルス薬である核酸アナログ（HBVDNAを強力に抑え、肝臓の炎症を止める）を服用することもあります。

また既感染がない人は、感染しているパートナーからのウイルス感染対策としてワクチン接種を行い、中和抗体を作って感染防御をすることが大切です。ぜひパートナー同士で一度はB型肝炎ウイルスを持っていないかチェックしておきましょう。最寄りの保健所、指定医療機関で、無料で検査を受けることができます。

次回は、B型慢性肝炎に関して、なぜ治療をしないといけないのかを中心にお話をしたいと思います。